

# 産大レクチャー ●●● アラ・カルト

〈188〉

前回の産大レクチャーでは、安達明久教授が「チャットGPTと大学教育」というタイトルで、大学教育におけるチャットGPTなど、生成系AIの積極的な活用や、その際の留意点などを説明されました。私も基本的な考え方については同感で、電卓(電子卓上計算機)と同様に、今後の社会では、もう一つ

の電卓(電子卓上「論述機」として日常的に使用されるようになるのだからと考えます。もちろんスマートフォンやパソコンが両機能を統合したデバイスとして使用されるでしょう。

インターネットの世界に広がる、無限とも思えるような情報の収集・整理や、それらに関する説明文章の作成まで、AI

が一瞬で行ってくれるため、我々がこれまで費やしてきた膨大な作業時間が短縮されるだけでなく、生成された文章を読むと、一般的な人が作成

う遠い将来ではないかもかもしれません。このように人類をはるかに凌駕(りょうが)した知能を持つAIが存在する世界に人類の居場所

## 「考えること」の重要性

する文章と区別がつかないレベルどころか、それ以上に洗練された文章が生成されているように見えます。人類が誇る文豪や絵画の巨匠などを超える作品を生成する日もそ

はあるのでしょうか。生成系AIの進化が人類社会に革命的变化をもたらす中、今年の5月30日、チャットGPTを開発したオープンAI社のサム・アルトマンを含む35

0人が「感染症のパンデミック(世界的大流行)や核戦争と同様に、人工知能(AI)が人類に絶滅をもたらすリスクを考慮すべきだ」とする共同

阿部 雅明

声明を発表しました。偽情報の拡散や差別の助長のほか、サイバー攻撃や兵器などへの軍事転用の問題などが懸念されるとしています。人の賢さを表す言葉に

は「知識が広い」や「思慮深い」のように横方向と縦方向の表現があります。が、ジャン・ジャック・ルソーは著作「エミール」の中で、「記憶と推論とは本質的に違う2つの機能であるが、それらはいずれも伴わなければ本心に発達しない」と述べています。

人工知能は知識・情報を収集し整理する能力において人類を軽く追い越して行くことになっています。が、知識や経験をもとに新しいものを作り出すのは思考する力であり、こ

の点はいまだ人類が優位であると考えます。暴力的とも言える知識や情報の氾濫の中で、人類社会の発展のために正しくそれらを活用するためにも、我々一人一人が、知識や情報を嚙呑(くわん)みにせず、「自分なりに考えていくこと」が今後ますます重要になるのではないかと、私なりに考えてみました。ちなみに本文章はチャットGPTフリー(不使用)です。

阿部 雅明(教授) 毎月1回掲載

# 「新潟大学スライム」 地域に学ぶ 地域を学ぶ ——実践活動レポート——

## 越後みそ西 周年感謝祭で 学生が大奮闘

「越後みそ西192周年感謝祭」が市内新道の本社工場駐車場で開催された。2021年に同社190周年記念イベントを実施、新型コロナウイルススプレッドにもかかわらず、好評だったとのこと。この度2年ぶりの開催が実現した。会場は大学のすぐ近隣という緑もあって、まちづくりを専攻する文化経済学科の

権田ゼミと、書道部、写真部、文芸部の学生の計19人が参加した。みそ蔵見学ツアーをメインに、しょう油の詰め放題コーナー、市内企業の飲食ブースが立ち並ぶ中、大学生は地域コラボ商品や文化部による作品の販売、子ども向けワークショップなど六つのブースを同時に展開。数日前から天候が危ぶまれており、朝の準備は身を凝らして雨風から品物を守りながらの作業となった。会場は幅広い世代の来場

者で大いににぎわった。鈴木克矩さん（3年）は子ども向けのスライムづくりコーナーを担当。「最初は子どもの対応に慣れず苦労したが、一緒に作っていくうちに緊張もほぐれ、完成した時には子どもたちの楽しそうな笑顔がとてもうれしかった」と振り返る。書道部は久々に地域のイベントではがきや色紙に書いた作品を販売した。部長の本間才揮さん（3年）は、「予想よりも売れた一方で、作品を鑑賞されただけで終わる方もいらしたので、もっと良い作品を作れるよう、一層、書の技術を磨いていきたい」と抱負を語った。

えんま市など大きなイベントが次々とあつての規模で復活している。小さい空間ながらも、地域に長く根付いている企業と地元の人々とのつながりの強さ、熱量を目の当たりにし、身体はくたくたでも、晴れやかな充実感を得られた一日だった。

地域連携センター長  
経済学部准教授・権田恭子  
（同大学地域連携センター）



# 国別対抗バレー熱戦

## 3カ国参加し総当たり



さまざまな国籍の人たちでつくるバレーボールチームによる「インターナショナルキャンプ2023」が9日、刈羽村ラビカで開かれた。2020年から始まり、3回目。在日モンゴルバレーボール協会が主催、柏崎バレーボール協会が協力。男子はモンゴル、ベトナム、日本の3カ国が総当たりで熱戦を繰り広げた。

主催の同協会は16年に、ガントルガ・エンフトグドルさん(32)によってつくられた。エンフさんは日本語学校を経て、現在新潟産大4年生。アメリカや韓国などには外国人チームが参加している。..... 壮絶な打ち合いとなった男子のモンゴル(目)ー日本戦11日、刈羽村ラビカ

加できる大会があるものの、日本にはなかったことがきっかけになった。歴大ではバレー部を創設し、市内大会への参加を目指すほどのバレー好きだ。

モンゴルチームのメンバーは東京、大阪など居住地はさまざま。各地で練習に励み、大会の時に集まる。この日は貴重な試合機会とあって、プレーやベンチは真剣そのもの。どの試合も連続デユースやフルセットの熱戦となった。

日本からは、市内外の10〜60代で構成する「排日A.L.L」が3大会連続の参戦。ユニフォームに日の丸をあしらひ、威信をかけて戦った。チームを率いる宮島浩一さん(60)は「モンゴルは身体能力が高く、ベトナムはテクニックがある。前回大会より仕上げてきた」と

舌を巻いた。エンフさんは「いずれは日本のバレー協会が主導し、他国籍のチームも参加できる大会を開いてくれることが一番の願い」と期待を寄せた。今大会から女子の部も新設。モンゴルに、ちいむK(柏崎市)、TOY(魚

沼市)、常盤高が挑んだ。モンゴルチームと闘い終えた常盤高・矢代恋花主将(2年)は「大人なのでスパイクの威力やブロックの高さがすごい。文化が違えば盛り上がり方も違って、楽しい試合だった」と話した。

# 「新約産業学生」 地域に学ぶ 地域をまもります

— 史践活動レポート —

## 防災警備を通じ 安全な暮らしを守る

柏崎刈羽原子力発電所には、発電所員と協力企業で構成された自衛消防隊が中越沖地震を契機に常設されている。その協力企業であるネクセライズ（東京都）の社員として2名の本学OBが働いている。片山雄起さん（令和2年卒・柏崎市出身）と加藤豪さん（令和3年卒・静岡県出身）だ。

「バーとして競技に打ち込む一方、救命救急を学び、夏は柏崎市内の海岸で監視・救助活動を行ってきたこと、卒業後の進路として防災に関連する仕事を志望した点だ。ネクセライズは、燃料の供給・輸送などのエネルギー事業や防災、脱炭素工事などを手掛けている。防災警備の対象は、原発施設の他に火力発電所や航空機給油施設なども含まれる。

「事故のない平穏な日常を守る」ことを仕事にしたいと思ったのは、大学のライフセービング部で活動したことがきっかけでした」と2人は口をそろえる。片山さんは現在の仕事について、「消火活動の基本は、どんな状況の現場でも対応できるように日々の訓練や資機材の点検などを徹底なまでに繰り返すこと。ライフセーバーが日常的に自分の身体を鍛え、救命技術を磨くことと変わらないです」と話す。

「消火作業はチームで行うものなので、定期的訓練を通してのチームワークが大切な点でも似ていると感じます」と加藤さんも共通点を指摘した。

同社柏崎刈羽事業所防災センター所長の天谷英明さんは「2人とも大学時代から自分ではない誰かのために厳しい練習に耐え、活動してきました。入社してからもさらなる訓練を重ね、発電所の安全を守ることを通じ柏崎地域に貢献していつてもらいたい」と期待を寄せ

る。

「災害のない発電所であるために、信頼される自衛消防組織の一員として活動する卒業生の活躍をこれからも見守っていきたい。」

↓  
（同大学地域連携センター）



片山さん（左）と加藤さん

# 熱気と興奮 パワー爆発

## 「たる仁和賀」心意気一つ

### ぎおん柏崎まつり

ぎおん柏崎まつりのたる仁和賀パレードが25日夜、市中で繰り広げられた。4



市民の心意気をアピールした「たる仁和賀」。威勢の良いもみ合いで楽しませた25日夜、市内東本町1

年ぶりの開催には、町内会や団体、グループなど31団体から約2千人、山車、仁和賀、みこしなど46台が参加した。昼間のうだるような暑さが夜まで続く中で市民の心意気を示した。26日は越後三大火の一つ、海の大花火大会、日本海の夜空を飾り、今年のまつりを締めくくる。

パレード開始の前に、まつり実行委員会長の西川正男・柏崎商工会議所会頭が「新型コロナウイルスの自粛期間も明け、ついに開催に至ることができた。今年初めて参加する人も多いかと思う。準備や練習に打ち込んだ成果を存分に發揮してほしい。皆さんの元気を熱気で柏崎を盛り上げていこう」と宣言した。

夕暮れとともに、いなせな法被、はんにんにパッチ姿の参加者たちが「セイヤ」「セイヤ」のかけ声で豪快なもみ合いを繰り広げた。子どもたちも軽快なリズムに乗せ、元気いっぱい舞技を披露。勇壮な仁和賀に交じり、アニメの「トトロ」「スラムダンク」を題材にした山車などが見物人を楽しませた。

一番手で実行委員会本部前で豪快なもみ合いを繰り広げた柏崎青年会議所は熱気むんむん。平川尚理事長(36)は「人口が少なくなっても、元気の柏崎刈羽を残していくために頑張りたい」と笑顔。伝統の山車を繰り出した種波町内会のテーマは「疫病退散」。6月のクイーンデー後から、「不動明王」の製作に取り組んだ。青年会長の榎本健弘さん46は「みんなが団結してテンションが上がる」と意気揚々。

鹿大のみこしで、水球部のキャップをかぶった佐賀県出身の2年・齋藤伸さんは「ふるさとにはこういうイベントがないので楽しい」と隊列の先頭に立ち、同部の同・榎橋歌さんは「大学のPRができればいい」。工大のみこしに乗った大学院2年・三宅春香さんは「学部2年のとき以来、商業施設ハコニワの緑日ブリスを手伝うなど柏崎が大好き。建築士として、まちの活性化に携われたい」と声を弾ませた。

上田県有志会でパフォー

乗った大学院2年・三宅春香さんは「学部2年のとき以来、商業施設ハコニワの緑日ブリスを手伝うなど柏崎が大好き。建築士として、まちの活性化に携われたい」と声を弾ませた。

上田県有志会でパフォー

町内会では、さらしをキリ

りとまいた藤附3年・大滝のぞみさんが「柏崎が盛り上がっていることを実感する」。常盤3年・内山「佳さんは「めっちゃ楽しい。高揚感を治道の人たちに伝えたい」とまつりを満喫した。

北園町の金子さんの家族は治道で見物した。柏崎小2年・佳那さんは「おぼあちゃんから浴衣を着せてもらったうれしかった。見ていると、自分も出たくなかった」とこぼり。母親の官美さん(49)は「大いに楽しみ、元気がもたらえる」。祖母の和子さん(78)は「みんなが一生懸命にやっています」と手振を送った。

治道では、大人に交じり中学生のカメランも大活躍。三中2年・古井謙成君は「きれいなみこしが被写体になり、最高の作品ができてさう」と、同・油田裕聖君は「みこしを見たのは初めて。パワーがあつて、いっぱい振りがたくなる。市展を目指して頑張りたい」とレンズをのぞいた。



大人に交じり、子どもたちも大活躍。元気をアピールした25日夜、市内東本町1



新潟産業大学

**たる仁和賀紙上パレード**

31団体・2000人参加